

半島における南北軸

辻 修次*

2008年の総選挙の結果は、驚きをもって迎えられた。ケダ、ペナン、クランタン、ペラ、スランゴールでの与党政権の陥落は、マレーシア側、日本側双方の専門家の予想を超えたものとなった。

議席の動向を伝える新聞紙面は、視覚的に鮮やかだった。半島内で野党の議席が「北」、与党の議席が「南」に大きく偏っていることが、塗り絵のように、明瞭なコントラストとなって映し出されていたからである。この紙面は、あたかも半島の南北という理解軸を明瞭に意識するように迫っているように思えた。半島部を理解するうえで、伝統的には東西の軸が好まれており、南北の軸は、東西軸に比べれば明示的に語られることが少なく、マレーシアを理解する定石とはいえない状況にあった。だが、現在のマレーシアを見る上では、南北軸の重みを感じずにはいられない。

東西軸は、半島部の経済格差や産業構造を英国植民地時代からの連続性の上に捉えるにあたって優れた思考ツールだった。東西軸は古典的な二重経済論を即座に連想させる。さらに、この軸は、新経済政策の思考の枠組みと見事に調和している。豊かな華人の西海岸と、貧しいマレー人の東海岸という二分法に従って、東海岸の経済的後進性の克服を目的に、大型の公共投資や政策融資が立案され多額の連邦予算が配分されてきた。しかし、この「東海岸神話」と新経済政策の共犯関係を不問に付すことは、ともすれば、マレーシアの地域格差・社会階層を見る目を曇らせることにつながっていた。

東海岸においては、貧困世帯はクランタンと、クアラトレンガヌ以北のトレンガヌ北部に集中している。トレンガヌ州内でさえ南北の差は鮮明である。石油化学工業で潤うトレンガヌ南部が貧困を完全に撲滅しているのに対して、北部では、第一次産業への依存度が高く、多くの貧困世帯を抱えている。パハン州クアンタンやトレンガヌ南部の州チュカイは、近隣に石油関連の重工業が立地することと、クランバレーへの短時間のアクセスが可能なのが相まって、都市の規模や経済力でクアラトレンガヌやコタバルに水を空けている。クアンタンやチュカイでの、ペトロナス関係者などマレー人の技術者・専門職の消費水準は非常に高い。ここまで名前をあげた地域では、いずれも人口の大多数がマレー人である。東西の対比が、国内の所得分配と民族間の対比を結びつける思考のルーティンに結びつくのに対し、南北の対比は、民族内での格差や近年の産業化と経済成長によって新たに生じた格差を映す鏡となっているといえるだろう。

南北の格差は、西海岸についても当てはまる。ケダ・ペルリスとクランバレーの格差は、パハンやトレンガヌ南部とクランバレーの格差より鮮明であり、スランゴール以南の南西部とも明確な格差が感じられる。マレーシア経済の屋台骨である電機・電子産業に対する投資は、クアラルンプールからクアラルンプール国際空港、LCTTでも知られる貨物空港、クラン港を経て

* マラヤ大学東南アジア研究科博士候補

ジョホール・シンガポールに抜ける南の幹線沿いに集まる傾向にある。これに対し、スランゴール以北のケダ、ペラは、地域経済を浮揚させる決定打となる新規の投資を呼び込めず、停滞が続いている。この二州の人口成長はマレーシア国内で最も鈍いものとなっている。クランバレーとジョホールバルが、人口や経済力を順調に伸ばしているのに対して、イポーは、もはや集積地としての力を失っている。こうしたペラ以北の停滞は、クアラルンプール周辺の住宅事情や郊外開発にさえ影響を与えている。南部の高級ニュータウン化に比べ北部の見劣りが目立ち、東京の都市圏が拡大する過程での、西・南と、東・北のコントラストを連想させる。

西海岸における南北の軸の設定は、一般的な経済現象としてマレー半島内の地域性を理解することを促しているように感じられる。クランバレーとシンガポールの二大都市市場へのアクセス、国外との貨物の輸送に適した大型の港湾や貨物空港が、国内の産業の立地や投資のパターンを規定している。規模の経済と集積の経済が、投資の集中を加速する傾向にある。また、経済のグローバル化の進展とともに、シンガポールとクランバレーの労働市場は規模でも質でも、他の都市圏を引き離しており、マレーシア経済のクランバレーへの一極集中の長期的なトレンドに抗うことは難しい。こうした産業の集積や、都市労働市場の一極集中傾向は、今日、マレーシア以外でも広く見られ、空間経済学によって一般論として説明されてきた現象である。

再度、政治に話題を戻そう。半島の北西部では、与党が軒並み議席を失った。インド系のデモの処理を誤ったことによるインド系住民の完

全な離反などが、与党敗北の原因として論じられている。しかし、北部のインド系の貧困が、グローバル化に伴う周縁化の一種として再燃した現象であることが示すように、普遍的な現象としての地域格差の拡大傾向が構造的な背景としてあげられる。さらには、本格的なグローバル化に先立ち、市場の失敗を補う公共投資が、長年、東西の地理的な理解軸に沿って行われてきたために西海岸北部に適切に分配されてこなかったことも、結果的に産業の南部への集積を促したといえるのではないだろうか。北西部における与党の退潮を、エスニシティーに基づく伝統的なマレーシア理解のフレームワークによって捉えた場合、PASの台頭を見落としてしまう。PASは西海岸においてケダ・ペラの二州で勢力を大きく伸ばしたほか、クアラルンプール北部のティティワンサでもはじめて議席を獲得した。その背後に、北部地域の停滞を見ることは不適切であろうか。半島東海岸でのPASの議席がクアラトレンガヌ以北に偏重していることとあわせて考えるとき、経済発展の中で生じた格差、グローバル化と連動した格差、そして、民族間問題に議論を収斂させ、東西の地域軸を自動的に当てはめていく与党の硬直化した思考の枠組みと、その帰結としての財政による所得再分配の失敗といった要素が浮上してくる。

以上、今日のマレーシアにおける、南北軸の重要性について述べてきた。南北軸を明確に意識することは、様々な事象を、エスニシティーの力学によって特殊マレーシア的に理解しようとする、マレーシア研究において好まれてきたスタイル自体を問い直すことにも繋がるのではないだろうか。